

文化財コーナー

藻原寺の山門を造り、
大堂を改修した書家

花房雲山

(NO. 353)
平成27年7月

藻原寺の山門は竜宮造りと聞いていたが、正しくは多宝塔造りという。

この山門は昭和八年（一九三三）十月に竣工した。造ったのは第七十八世貫首花房雲山（明治三年～昭和十一年、一八七〇～一九三六）である。日我と号し、雲山は書家としての雅号である。

雲山は、明治時代の書家で書法教授の西川春洞（弘化四年～大正四年一八四七～一九一五）に師事し書を学んだ。同門に武田霞洞（慶応元年～昭和十年、一八六五～一九三五）、豊道春海（明治十一年～昭和四十五年、一八七七～一九七〇）がいた。共に昭和の三筆と称された書家である。

雲山が藻原寺の貫首として入山したのは昭和七年（一九三二）九月二十日であった。当時古い楼門は大正六年（一九一七）の台風で倒壊し、祖師堂（以後大堂と表記）も傷みが激しく修繕しなければならなかった。

雲山は、山門の造営と大堂修

繕工事をする計画を立て、その資金は雲山が天稟の能筆をもって全国に呼びかけ浄財を作った。完成した山門は、高さ二十五

メートル、コンクリート造り三階建てである。外壁は白、欄干を赤、そして緑の屋根瓦、その上に白い相輪が立ち美しい。一階中央にはドーム形の通路があり、両側には高さ二八五センチの仁王像が安置されている。この仁王像は、胎内銘札から永禄六年（一五六三）六月二十八日、領主真里谷隼人佑信長が寄進したものである。傷みが激しいため、平成十五年に現貫首、持田日勇猥下により修復された。



▲藻原寺山門

山門が完成すると続けて大堂改修に取りかかり、屋根瓦の葺替と同時に土台を持ち上げ縁下土台をコンクリートに改修、回廊階段もコンクリートに造り替え

た。その時の様子を雲山が記録した棟札がある。棟札は、縦一八二・五センチ、横四〇・二センチ、厚さ三・〇センチの大きさとで、内容は、「昭和十一年自三月至十一月九ヶ月間大堂改革の砌、東身延七十八世権大僧正雲山日我（花押）」とある。裏には大堂改修に携わった衆徒の一覧が書かれている。筆頭に工事主任監督は本久寺住職持田貫道とあり、現藻原寺貫首の御尊父である。雲山門弟で号を雲道という。

大堂完成の直前、雲山は病となり落慶を見ずして昭和十一年九月四日遷化、六十七であった。藻原寺山門は雲山日我上人最晩年の建造物となった。

昭和十一年十二月十三日落慶本葬が執り行われた。藻原寺には常在講が奉納した縦七十四・五センチ、横二一九センチの「藻原山」と書かれた雲山の書が掲げられている。



▲花房雲山の書（藻原寺所蔵）

権大僧正、常寿院釈貫隆（花房雲山）は藻原寺の大堂左手の小高い所の歴代墓所に眠っている。

茂原市文化財審議会委員

佐藤 信夫

文芸コーナー

小鳥と木の实

金網 あき子

小鳥が庭に落ちていった一粒のハツ手の種が数年で私の背丈を越えました子供の手ほどだった小さな葉っぱが今は野球選手のグローブほどの大きな葉っぱに風も穏やかな初冬の暖かい陽さしの中で

今年も白い花がバチバチと線香花火のように弾けていますハツ手は幸を掻き寄せ縁起の木よ、と教えてもらった小鳥から貰った幸せの木

今年もそろそろ実の収穫期私の物よと遠慮なしに小鳥たちが来るだろうさあどうぞ沢山食べて

どこかの野山の上から今年も種をまいてくれるでしょうねスケールの大きい仕事をすする小鳥さんあなたは緑化運動の功労者あなたのお蔭で日本の野山は美しい

◎選評 斎藤正敏

小鳥が運んできたハツ手の種。数年して作者の背丈を越えて葉っぱもグローブほどの大きさに。自然界での小鳥たちの果たす役割。緑化運動の功労者に思いきり声援を送る作者です。

- 偶数月は「俳句・短歌・川柳」を、奇数月は「詩」を掲載しています。
- 投稿は楷書でお願いします。作品・氏名にふりがなをふってください。

※詩の原稿送付先（直接選者）へ 〒297-0032 茂原市東茂原7番地 斎藤正敏宛。

「広報もばらの詩」と朱書きしてください。原稿は30行以内でお願いします。

